

山のおじゃまむし

平成30年度号



はじめに

昆虫類の中には害虫と呼ばれ、目の敵にされているものがあります。農業、林業、果樹や花卉などに被害を及ぼす害虫や私たちに激痛、湿疹、痒みなどを与える毒虫などです。このほか、姿だけで得体の知れない虫、気味が悪いといって嫌われている不快害虫？もいます。その数は無数です。

しかし、これらの害虫も地球に棲む生物の一員。厳しい自然界を生きています。その生き様は実に巧妙です。驚きます。その知恵には感心してしまいます。

このシリーズは私が目にしたこれら害虫の生活やその時の出来事、感じたことをエッセイにしたものです。学術書ではないので軽い気持ちで読めると思います。暇なときや気分転換を図るときに御笑読いただければ幸いです。

なお、タイトルは「**山のおじゃまむし**」となっていますが、山にはたくさん害虫がいるからという単純な発想からです。このため、山だけでなく田、畑、果樹の害虫から一般昆虫、さらに昆虫でない動物も登場します。

一般財団法人自然学総合研究所 理事 野平 照雄

山のおじゃまむし(60)

超普通種、オジロアシナガゾウムシ

昆虫マニアの間では、あまり採れないものを珍品、これよりさらに採れないものは大珍品としている。逆によく採れるものは単に普通種と呼んでいる。最近では、これに「超」をつけて「超大珍品」、「超普通種」などと呼んでいる者もいる。私はゾウムシ採集を行っているが、残念ながらこの超大珍品というものは数匹しか採っていない。逆に超普通種はずいぶん採集した。さすがにこれだけ採ると嫌気がし、最近では見向きもしなくなってしまった。過日、これが災いして、「しまった」となってしまった。

× × × ×

女房と根尾村の左門岳へ登山に出かけた。ところが数日前の豪雨で登山道に通じる道路が決壊し、通行止めとなっていた。仕方ないのでゾウムシを採集することにした。しかし、暑いだけでゾウムシはあまり採れなかった。「山登りでけちがついたおかげで、虫も駄目だ」と女房に愚痴をいい、昼食にした。おにぎりを食べていたら足がむずむずしてきた。なんだろうとズボンの裾をあげたら、足に大きなヒルが8匹も食いついていた。どれも血をすって丸々としていた。足は血だらけで、さすがの私も鳥肌がたった。女房は見たとたん食欲がなくなってしまった。ヒルは足から離れなかったの、私は思いっきり引き抜いた。そのあとかからは血が流れ出てきて血の海となった。ヒルは憎しみをこめてすべて踏みつぶした。ここも血の海となった。

× × × ×

昼食後はヒルのいる藪へ入らずに採集することにした。これだったらヒルには食われないだろうと、木の葉や枝にいるゾウムシを探した。しばらくしたら今度は首がおかしい。またヒルに食われたのかと首に巻いているタオルをとったら、やはりヒルが食いついていた。木の上から落ちてきたのである。もちろん、このヒルも血祭りにあげた。そのあとは首にタオルを巻かずにより慎重に採集を続けた。しかし、ヒルの方が一枚うえだった。今度はわき腹に2匹食いついていたのである。首にタオルを巻いていなかったの、直接服の中へ入ったようだ。これだけ食われるとさすがの私も集中して採集ができなくなった。こうなると採れるのは普通種ばかりである。中でも多かったのは超普通種のオジロアシナガゾウムシであった。この超普通種は最初から採るつもりはなかったの、そのつど捨てた(逃がした)。帰り間際にまたオジロアシナガゾウムシが2匹採れた。2匹とも今までのものよりはるかに小さかった。「こいつは栄養不足か」と思い、何となく1匹だけ持ち帰った。

× × × ×

家に帰って風呂に入ろうとしたらシャツが血に染まり赤くなっていた。よく見ると腹に2ヶ所の食いあとがあった。ここから血が出ていたのである。洒落ではないが、ヒルは腹から腹一杯血をすって出て行ったらしい。結局この日は13匹のヒルに血を提供してしまった。無性に腹がたってきた。風呂から出て、採集したゾウムシを整理し始めた。びっくりした。中に超大珍品のシロオビクロタマゾウムシがいるのである。「しまった。もう一匹もこいつだった」と思った。小さなオジロアシナガゾウムシと思っていたのが、実はこの超大珍品だったのである。この2種はともに鳥の糞のような白と黒の入り混じった模様なのでよく似ている。老眼の進んだ私は色模様だけで、超大珍品を超普通種と判断してしまったのである。悔やんだけど後の祭りであった。はじめにけちがついたら、最後までけちのつきどおしであった。こんなことであるのだろうか。きっと、こんな日は仏滅だろうとカレンダーを見たら皮肉にも大安であった。

山のおじゃまむし(61)

塩漬け、ナメクジ

私は庭に小鳥用の餌置き台を設置し、ここに来る鳥を観察している。餌置き台は長い棒を地面に刺しこみ、この上に板を取り付けただけである。こんな簡単なものに鳥が集まるのだろうか。設置した当初はこんな心配をした。しかし、無駄な心配であった。餌置き台に市販されている小鳥用の餌をおいたところ、翌日にはもうスズメが飛んできた。はじめは2、3羽であったが、だんだん数が増え10羽前後が常連客となった。ある日、いつもとは違ったスズメの鳴き声をした。けたたましい鳴き声なのである。餌置き台をみるとスズメ同士が餌のとりあい争っていたのである。これでは駄目だと思い、台を広くした。その後は毎朝10数匹のスズメが訪れ、争うこともなく餌をついばんでいた。ほほえましい光景であった。ところがある日突然来なくなってしまった。

× × × ×

原因は鳩であった。いつからかこの餌台に2羽の鳩が来るようになり、スズメを追い出したのである。私はこの鳩を来させないようにするため、大声をだして脅した。鳩はその都度逃げるものの、私がその場を去るとまた集まってきた。私はまた追い払う。鳩は逃げる。この繰り返しをしているうちに私はあきらめて鳩に餌をやることにした。その後はスズメにかわって鳩が日参した。ところが、ある朝またスズメの鳴き声をした。餌台を見るとたくさんのスズメが来ているのである。なぜ、今になって。不思議だった。餌台に近づいてみると、地面に鳩の羽が散らばっていた。私は猫に襲われたのだと思った。数日前から野良猫が歩き回っていたからである。猫のお陰でまたスズメが来るようになった。しかし、私は鳩が気の毒で喜ぶ気にはなれなかった。

× × × ×

私は数日間家を留守にした。家に帰ると娘は言った。「スズメが来なくなったよ」。私はまた鳩かと思った。しかし、鳩も来ないと言う。何故だろう。いくら考えても原因はわからなかった。別の餌を与えてもスズメは来なかった。それでもいつかは来るだろうと餌だけはとりかえた。ある日、餌台にナメクジの這った跡があった。「ナメクジが原因だ」と私は直感した。ナメクジの体から出る粘着液や匂いはスズメも嫌がるだろうと思ったからである。その夜、餌台をみた。私は鳥肌がたった。そこには大きなナメクジが5匹もスズメの餌に群がっていたのである。棒の部分を見るとここにもナメクジがいた。ここを登って餌台に向かっていたのである。よくあんな高いところに餌があることがわかったのだと感心した。ナメクジは箸でつまんで容器に入れ、塩をかけた。ナメクジは体から粘着液を出し溶けたようになった。

× × × ×

翌日もその翌日もたくさんのナメクジが来ていた。その都度同じように塩漬けにした。これでは駄目だと思い、地面に筒状の塩ビ管を置き、この中に棒を差し込んだ。こうすればナメクジは登れないだろうと考えたからである。しかし、ナメクジはこの防壁を簡単に突破してしまった。私はナメクジの餌に対する執念みたいなものを感じた。「こうなればナメクジをとって数を減らすしかない」。恐らく塩漬けにしたナメクジは100匹以上だろう。ナメクジ退治したら、数日後にはスズメが集まってきた。今日も常連が来て、餌をついばんでいる。のどかな光景だ。それにしても、スズメのためとはいえ、ナメクジの塩漬けとは、むごいことをしたものだと思う。

山のおじゃまむし（62）

葉をむしる、ルリチュウレンジハバチ

町内の A さんが「木のお医者さんに相談したいのですが」と私を訪ねてみえた。どうも私が樹木医の資格をもっていることを誰かから聞いたらしい。「私の大事にしているツツジが丸坊主になってしまったのですが、原因は何でしょうか。枯れてしまわないでしょうか」という相談であった。樹木医といってもピンからキリまである。私はキリの部類のへボ医者だと思っているので、うまく診断ができるかどうか心配であった。重い足どりで A さん宅へ行った。枝ぶりのよい立派なツツジであった。しかし、ツツジには葉がなく丸坊主であった。この無残な姿をみて、私は前に見たあのケースと同じではないかと思った。あのケースとは・・・。

× × × ×

数年前、岐阜市の先生から庭のモミジが急に枯れたので原因を調べてほしいという電話があった。そのモミジは 2 m 前後の低木であったが幹が太く、立派な樹形であった。しかし、葉が一枚もなく、見るも無残な姿となっていた。私は蛾の幼虫にでも食われたのだろうと地面を見た。糞が落ちているだろうと思ったからである。しかし、見当たらなかった。おかしい。私は狐につままれたのではないかと思った。なんだろうと考えたものの、原因がわからなかった。数日後、もう一度調べにでかけた。その時、たまたまこの庭を管理している庭師さんがいた。私は事情を話すと庭師さんは「虫なんかではないよ」と言われた。「え！」と私。「それは私が葉を全部むしったからだ」。葉をむしった。私は何の事だかわからなかった。庭師さんは「葉が無くなるとまた新芽がでてくるだろう。そうなればもう一度新緑を楽しむことができる。私は先生に喜んでもらうために葉をむしったんだ」と言われた。私は唾然とした。葉をむしる。思いもしないことが原因であった。これではどんな名医でもわからないだろうと思った。

× × × ×

こんなことが頭に残っていたので、私はまずそのツツジの根元周辺を見た。糞がたくさん落ちていた。原因は虫だ。何虫だろうと幹や枝を見た。ところどころに幼虫がいた。ルリチュウレンジハバチであった。どうもこの虫が葉を食べてしまったようだ。ルリチュウレンジハバチはツツジの害虫として知られている。しかも年に 3 回も発生するという困った虫だ。このため、運が悪いと立て続けに被害にあうこともある。また、この虫は時々メスだけで繁殖することがある。メスだけで増えていくのだから数は激増する。この時に大発生となるのだ。私はこのツツジの幼虫も全部メスなのだろうと思った。A さんに被害原因とこの虫の説明をした。「え！。メスだけで増える」。おどろき顔の A さんはツツジのことはそっちのけにして、この虫のことをさかんに聞いてきた。

× × × ×

A さんは「すると B さん、C さん宅のツツジもこの虫なのね」と言われた。やはりこのツツジと同じように丸坊主になっていたという。「どうも今年はこの虫が大発生する年のようだ」と思うと同時に我が家のツツジのことが心配になってきた。我が家には 3 本ツツジがあるのだ。早々に帰って調べたら、2 本が丸坊主になっていた。「しまった」と思ったものの後のまつりであった。しかも残りの 1 本にも多数の幼虫がいた。この小さな幼虫が木を丸坊主にする。チリも積もれば山となるではないが、数の恐ろしさを肌で感じた。それから何日かして丸坊主のツツジから新芽が出てきた。私は女房に言った。「このツツジの新緑をもう一度楽しむために虫退治をしなかったんだ。どうだきれいだろう」。

山のおじゃまむし(63)

雪に舞う、フユシャク

10月は2週続けて土日に行事はいり、女房と予定していた登山に行けなくなった。女房は「なんで土日に行事があるの」と不満そうであった。「次の休みに行くから」と女房をなだめ、その場をしのいだ。しかし、悪いことは続くもので、今度は私的なことで行けなくなった。まさに「二度あることは三度ある」であった。こんなことで10月は山登りができず11月になってしまった。この頃から急に寒くなり、飛騨や奥美濃からは雪の便りが届くようになってきた。今年も虫のシーズンが終わったかと思ったら、私は急に山登りが億劫になってきた。しかし、女房は逆に登山に行けるのを楽しみにし、その日を待ち望んでいた。私はその姿を目にし、約束を果たさなければと思った。

× × × ×

しかし、この寒い時に登山と思うだけで、気が重くなってきた。4時間もかけて登るのは大変なので2時間くらいで登れる山をさがした。インターネットで調べたら上石津町の烏帽子岳が2時間で登れるとでてきた。「よし、ここだ」。ここへ行く事に決めた。午前8時、自宅を出発した。10時に登山口へついた。案内板には頂上まで1時間半となっていた。これだったらゆっくり登っても3時までには戻れる。そう思って歩き始めた。天候は曇りで、少し寒かった。しかし登り始めたら暑くもなく寒くもなく快適であった。1時間ほど登ったら、所々に雪が残っていた。さらに登っていくとだんだん雪が多くなり、登山道も真っ白になってきた。歩くペースが落ちてきた。そのうちに登山道がわからなくなってきた。時計をみると歩き始めてから2時間を過ぎている。頂上はすぐそこだと道無き道を登っていった。頂上についた。しかし、標識はない。おかしいとは思ったものの、腹が減っていたので食事にした。食事をしていたら蛾が数匹舞っていた。フユシャクであった。

× × × ×

フユシャクの舞いは実に弱々しかった。その舞いをしているうちに、以前見たあの光景が脳裏に浮かんできた。私は荘川村の広葉樹林で調査をしていた。その時運転手のNさんが「ウワー」と大声をあげた。驚いてかけつけると異様な光景が目に入った。フユシャクが林内一面舞い舞っているのである。その数はどれくらいか想像もつかなかった。とにかくすごい数であった。しかも地面すれすれの所をゆっくり飛んでいるので、まるで絨毯を敷いたようであった。フユシャクの雌は羽がないので飛ぶことが出来ない。私は雌をさがした。しかし、数は少なかった。雄100匹に対し1匹の割合であった。昆虫界ではおこりうることとはいえ、なぜか不思議に思えた。それから3日後、再び同地を訪れた。しかし、1匹もいなかった。あの大群はどこへいったのか。またまた不思議であった。

× × × ×

帰ろうとしたら、夫婦ずれが登ってきた。「頂上はまださきだよ」。「え！違うの」。急に体から力が抜け、頂上などどうでもよくなった。しかし、気を取りなおして再び登り始めた。しかも足が冷たい。楽しいどころか苦痛になってきた。ようやく頂上についた。風が強くて寒い。三角点を見て早々に下り始めた。さっき食事をしたところへ戻ってきた。しかし、フユシャクはいなかった。もうそんなことはどうでもよいと、ただひたすら降りた。4時間コースが6時間になってしまった。改めて雪山登山の厳しさを痛感した。帰路、車の中であのフユシャクはまた舞っているのだろうか、あの弱々しい舞い姿を思い浮かべた。

山のおじゃまむし(64) 送別会、ゴマフカミキリ

毎年2月から3月にかけては退職される方の送別会が開催される。ここ数年は退職される方が多いせいか、私は毎年5、6人の送別会に出席している。何回も出席しているうちに失礼な言い方ではあるが単なる儀式のように思え、つまらなくなってきた。しかし、印象に残る送別会があった。それは高山市にある「県庁トンボ会」の送別会である。メンバーは大部分が田舎育ちの根っからの飛騨っ子。普段は都会人ぶっていてもお酒が入るとすぐに飛騨弁丸出しの飛騨人になってしまうので、誰とでも気楽に話すことができる。だからすごく楽しい。特に今回は楽しい上に懐かしく、ちょっぴりセンチで寂しさも感じた思い出に残る送別会であった。

× × × ×

トンボ会の会場はずっと前から某旅館と決まっている。ここの支配人も斐太高校の卒業生だからだ。「どやな、まめなかな。ようきてくれはった。会場はあっちやで、せいで行ってくれよ」。支配人はこんな飛騨弁で迎えてくれるのでよけい親しみがわく。今年の出席者は54名で、このうち送られる者は4名である。実は私もこの4人と同級であるが、彼らは1年前に退職するので、私は送る側になったのである。同級生が同級生を送る。何とも複雑な心境であった。まず幹事の挨拶があった。「また決まりの儀式か」と思ったが、そうではなかった。心に残る実によい挨拶であった。話を聞かされた時にその時々の方が脳裏を去来し、大変懐かしかった。すっかりタイムスリップしてしまった。私は刈安峠と聞いて、あのゴマフカミキリだと思った。

× × × ×

私は中学生までは蝶を追いかけていたが、高校に入学したのを機会に甲虫類を集めはじめた。しかし、採り方がわからずほとんど採れなかった。そんな時、遠足で刈安峠へ行った。途中で薪用の材が積んであった。何の気なしに見たら、そこに触角の長いカミキリムシがたくさんいた。「カミキリムシだ」と夢中になって採った。これが私の採ったカミキリムシの第1号である。うれしくて、胸がドキドキした。あの感激は今でも忘れることができない。図鑑で調べたら、ゴマフカミキリであった。色は地味であったが、光り輝いているよう見えた。その後、このカミキリムシは薪などの広葉樹でたくさん採れることがわかった。あまりにも採れるので、そのうちに見向きもしなくなってしまった。そのゴマフカミキリを思い出したのである。

× × × ×

私は主賓の同級生と盃を交わしながら刈安峠のことを聞いた。しかし、あまり覚えていないという。しかし、私はゴマフカミキリを採ったという強烈な思い出があるので、今でもはっきり覚えている。体力、気力それに若さで満ち溢れていた。それが今では5人とも、禿げ、白髪、肥満、高血圧、糖尿病などが気になる年になってしまった。「俺たちにも青春時代があったのだな」と一人がつぶやいたら、5人とも急にセンチになってしまった。最後に校歌を歌って退職者を送った。そんなことを思ったら自分だけが取り残されたようで、今度は急にさびしくなってきた。

山のおじゃまむし(65)

ホタルブクロに潜む、カミヤコバンゾウムシ

ゾウムシの中に〇〇〇コバンゾウムシというのがいる。いわゆるコバンゾウムシの仲間だ。体はやや丸みを帯びた楕円形で、何となく小判のような形だ。「だからコバンゾウムシか。なるほどなあー」と思う。日本には7種いるが、ほとんどが希少種というかそんなに簡単に採れる種ではない。私自身もゾウムシを追い回しているが、採集したのは4種類である。どれも思い出深いゾウムシであるが、特に印象的なのがカミヤコバンゾウムシである。

× × × ×

当時私は御岳山麓にある千間樽牧場へよく採集に出かけた。牧場内にはいろいろな草木が茂っていた。特に目についたのが野アザミであった。ある日、この野アザミの枯れた花の中に小さなゾウムシが潜り込んでいるのを見つけた。はじめて見るゾウムシであった。これは珍品だと直感した。もう少しいないかとさらに枯れた野アザミを調べた。しかし採れなかった。何とんでももう2〜3匹欲しかかったので、1週間後に再びこの牧場へ出かけた。枯れた野アザミの花を徹底的に調べた。おそらく百個は超えただろうと思う。努力しただけのことはあった。2匹採れたのである。恐らくこのゾウムシはアザミの枯れた花の中で生活しているのだろうと思った。その後、このゾウムシは希少種のカミヤコバンゾウムシであることがわかった。しかし、これ以降このゾウムシとはまったく出会うことはなかった。

× × × ×

私はあるゾウムシをねらって白川村荻町へ出かけた。谷筋にあるドロノキの葉を捕虫網ですくった。しかし、目的のゾウムシは採れなかった。途中から長竿に捕虫網を取り付けて上の方の葉をすくった。やはり採れなかった。6mの長竿を振り回すのは力のいる仕事である。腕が痛くなってくる。特に採れないときはよけい痛くなるし疲れる。もう止めようと竿をしまいかけた。しかし、そのゾウムシに未練が残り、再度長竿を振り回した。何回か振り回しているうちに見たことのあるゾウムシが捕虫網に入った。「カミヤコバンゾウムシだ！」と心の中で叫んだ。元気が出てきた。どこにこんな力が残っていたのかと自分でも不思議に思いながら長竿を振り回した。この努力に神様がプレゼントしてくれたのか、幸運にももう1匹採ることができた。「それにしても、今度は野アザミでなくドロノキか。このゾウムシはどこが生息場所なのだろう」。疑問が残った。

× × × ×

全国のゾウムシ狂いが白川村に集まりゾウムシ採集をした。メンバーの大部分は呑み助なので、いうまでもなく夜は酒、酒、酒。翌朝、明るくなっても前日の後遺症なのか、メンバーのほとんどがまだ白河夜船。ただ、兵庫県のSさんだけは採集に出かけた。しばらくして「カミヤコバンゾウムシがたくさん採れますよ」。皆が「え！」と驚きの声。「ホタルブクロの花で採れますよ」。この言葉を聞き終わらないうちに皆はいっせいで出て行った。カミヤコバンゾウムシがホタルブクロの花の中に潜んでいたのである。皆は数匹ずつ採集した。「このゾウムシはホタルブクロに隠れていたのか」と皆が口にした。ホタルブクロはよく見かける。しかし、誰一人この花の中を見なかった。だから今まであまり採れなかったのである。ゾウムシを採るには、まず食草や生息場所を突き止めること。この鉄則を今回も痛感した。それにしても5匹しか採れなかったこのゾウムシが、1度に何十匹も採れるとは思ってもしなかった。しかし、枯れた野アザミの花に潜んでいたのも事実。「これはなぜだったのだろう」。この疑問だけが残った。

山のおじゃまむし(66)

熊が出た、マガタマハンミョウ

岐阜県昆虫分布研究会主催の採集会がやってきた。日時は7月26日、午後5時集合。場所は某宿泊施設だ。今年は何が採れるだろうと胸を躍らせて出かけた。参加者は10名。ちょっと少ない。しかし、大勢だと虫の採り合いになってしまうので、これくらいの人数でよいのかも知れない。夕食後、すぐに夜間採集に出かけた。場所は万波高原。ブナ林が点在し、いかにも虫がいそうだ。発電機をまわし水銀灯をつけると白幕にはたくさんの虫が集まってきた。しかし、ほとんどが蛾だ。目的のゾウムシは飛んでこない。そのうちに眠くなり、あくびをした。すると口の中に蛾が飛び込んできた。吐き出すとシャチホコガだった。ついていないとこんなものだと思った。しかし、もしドクガだったら口の中が炎症してなどとその光景を想像したら、逆に「運がよかったのだ」と思った。午後11時、採集をやめて岐路についた。途中、林道に大きなカモシカが出て来た。車を近づけると少し逃げ、またこちらを見ている。まるで私たちをからかっているようであった。宿ではこの話題からはじまり、虫談義と宴会が延々と続いた。

× × × ×

翌日、各自がそれぞれの場所へ出かけて採集をした。私は小白木峰登山道沿いで採集をした。しかし、捕虫網には虫が入らない。捕虫網を振り回しても、これといったものは採れなかった。しばらくしたら尾根へ出た。すばらしい眺めであった。これが山かと思われるようななだらかな山頂付近は、まるで緑の絨毯を敷いたようであった。頂上では中年夫婦が食事をしていた。「こんにちは」。私が声をかけると、「こんにちは」。そして、「何をしてみえるのですか」。「昆虫を採っているのです」。「蝶ですか」。「いいえ」。だいたいこのパターンだ。しばらく話していたら、「途中で大きなカモシカに出会いました」と主人。「私も昨日みました」。その後、奥さんが「熊かと思い、びっくりしました」。私は笑いながら、「熊なんかでできませんよ」。奥さんは安心したようであった。結局、この日もこれといったものは採れなかった。

× ×

3日目はマガタマハンミョウをねらって天生峠へ出かけた。このハンミョウは羽が退化して飛ぶことが出来ないため、産地は限られている。天生峠はその数少ない産地のひとつなのである。「今日は絶対採れる」。自信をもって出かけた。峠の駐車場より先は通行止となっていたので、まずこの道路を歩いて採集した。そこを曲がったら、私はびっくりして体が硬直してしまった。前に大きな熊が歩いていたのである。私は「熊だ!」と思ったものの、声が出なかった。この直後、熊は私に気づき、振り向いた。目と目があった。私は駐車場へと走った。「熊なんかでできませんよ」。昨日口にしたこの言葉が反動となって返ってきたように思えた。

× × × ×

駐車場についたら大きな鈴の音が耳に入った。監視員だった。私は監視員のところへ行き、熊に出会ったことを話した。監視員は「道路にもおったか。困ったものだな。二日前にはこの駐車場近くにも出てきたしな。とにかく今年は熊が多いわ」。「そんなに多いのですか」。「多い。仲間とそのうちに人が襲われるぞと心配しているのだ」。監視員はさらに話を続けた。「あんたも、10秒違ったら襲われて大怪我、下手をすると命がなくなっていたかもしれんよ」。私は再び冷や汗が出てきた。そして監視員は「熊よけ鈴も付けずに山へ入るなんて無茶だよ」と言われた。私はこの言葉をきいて、さすがに今日はマガタマハンミョウを探す気にはなれなかった。

山のおじゃまむし(67)

縁遠い虫、ヨコヤマヒゲナガカミキリ

昆虫の中には、たまにしか採れないものがある。こうした種は希少種あるいは珍品と呼ばれ、マニアは必死になって探す。私もその一人だ。しかし、なかなか採れない。何処をどのように探せばよいのかわからないからだ。だから運がよかったから採れたという類の虫なのである。こうした希少種の中にはライトトラップで採れるものがある。暗闇で水銀灯を灯すと、その光りに集まってくるからである。もちろん数は、今の流行言葉で言う超少ない。それでも私はこの超少ない虫を採るために、発電機を車に積んで方々でライトトラップを行ってきた。しかし、未だ「採った！」という喜びは味わっていない。

× × × × ×

以前、白川村大白川でライトトラップを行えばタマヌキオゾウムシとヨコヤマヒゲナガカミキリが採れるとT氏が教えてくれた。この両種はともに珍品で、もちろん私は採ったことがない。「よし、採ろう!」。私は車に発電機を積んで、ここへ何回も出かけた。暗闇の中を一人でいるのは、正直言ってつまらない。特に、何も採れないときはむなしさが残る。そのうえ雨が降り出すと悲惨だ。泣きたくなくなってくる。こんなことを何回も繰り返した。しかし、これだけ執念を燃やしても、神様は私にプレゼントを与えてくれなかった。この虫は私に練達い虫。いや、採れないというのが私に与えられた宿命とまで思ってしまった。こうなると、気力が萎え、再度行く気がしなくなってしまう。そして、発電機は物置へ。

× × × × ×

1年後、再び気力がわいてきた。「よし、もう一度挑戦しよう。今度は採れる」と自分に言い聞かせて発電機を車に積んだ。しかし、採れなかった。「やっぱり駄目か」と落胆しかけたが、それより前に頭へ血が上り1週間後に再度出かけた。この日は肌寒かったので、焼酎のお湯割りを飲みながら、水銀灯を眺めた。しかし、虫は来ない。腹に入る焼酎だけが増えていった。だいぶ酔いが回ったときである。黒い大きな虫が音をたてて飛んできた。ヒメオオクワガタのオスであった。この虫もあまり採れないので、少し気分を良くした。「ひょっとしたら採れるのでは」。そんな気がしてきた。それから1時間後、触角の長いカミキリムシが飛んできた。「もしかしたら」と思いその虫をみたら、何と長年にわたって追い続けてきたヨコヤマヒゲナガカミキリではないか。「採った!」と思わず声が出た。胸が高ぶった。万歳。私は再び焼酎をわかして、ひとりで乾杯した。

× × × × ×

喜び勇んで家へ帰った。「今夜は祝杯だ」と家族にいった。しかし、返事がない。それどころか様子がおかしい。「ネズミがいるので、台所のものが食べられないか心配なの。お父さん捕まえてよ」。と娘が言った。「ネズミに食べられないようにしておけば」と適当に答えた。女房や娘たちは口をとがらせて「何なの、その返事は」。私はヨコヤマヒゲナガカミキリの触角や足を整えて標本棚の上に置いた。この日のビールは格別に美味しかった。桃源郷にいるようであった。ところが翌日、奈落の底に転落した。その虫がネズミに食べられたのである。なんと無残な姿。女房や娘に私の心境を話した。すると口をそろえて「何で、ネズミに食べられないようにしておかなかったの」と昨日のお返しをし、大笑いした。あの時、ネズミ捕獲器をかけておけばよかったと思ったものの、後の祭りであった。その夜は悔しくて眠れなかった。「やっぱり、この虫は縁遠い虫か」と自分自身に言い聞かせていたら、むなしくなってきた。

山のおじゃまむし(68)

還暦同窓会、クサギカメムシ

高校時代の同窓会が開催された。名づけて還暦同窓会。名前に少々抵抗を感じたが、胸をわくわくさせて出席した。場所は高山市の一流ホテル。玄関には大きな看板が出ていた。そこには「還暦を記念する同窓会」となっていた。どうやら幹事も還暦という言葉に抵抗を感じたようだ。受付にはたくさんの人が来ていた。「やあやあー、元気か」「お前もか」。あちこちでこんな会話が交わされていた。出席者はほぼ半分の98名。ずいぶん集まったものだ。中には九州から駆けつけたものもいた。これも還暦という二文字の威力かと思ひながら会場へと向かった。

× × × ×

私のとなりには女性が来た。見るなり「Kさんじゃない。久しぶり」。私は声をかけた。「野平さんでしょう」。そして「今でも虫を追っかけているの」。これが42年ぶりにあったKさんとの初めての会話であった。イヤー参った。こんな話がでるとは夢にも思わなかった。彼女はきれいであった。とても還暦とは思えなかった。この彼女が私のことを覚えていてくれたので、悪い気はしなかった。セレモニーが始まった。その中で、物故者の紹介があった。10人も亡くなっていた。「え、あいつが」「まさか」。こんなささやきがあちこちで聞こえた。そのひとりにH君がいた。私は啞然とした。夢ではないかと思った。彼は国家公務員で定年退職し、2ヵ月後の5月に亡くなってしまった。「さぞ無念だっただろうな」と胸が痛んだ。この後、高校時代の写真がスクリーンに写しだされた。皆、若かった。青春真っ只中であるということが、写真をとおして伝わってきた。それが今は、白髪に禿げに肥満。もうよそう。むなしいから。やはり還暦か。思わずため息が出た。

× × × ×

宴会になった。私はあちこちを回った。42年ぶりに会うというものが10数人いた。この中にM君がいた。彼は数年前に病で倒れ体が自由に動かなくなってしまった。それなのに無理をして出席していた。おそらく同級生に会いたいという一念だったのであろう。「これが同級生だ。同級生はよいものだ」と思った。T君が話しかけてきた。「奥さんは元気」。私はなんでこんな話をしたと思った。彼は私の女房を知らないからである。「うるさくてしょうがないよ」と私はいいかげんに答えた。彼は「罰があたるぞ」と言った。彼は5年前に奥さんを亡くし、今は一人暮らしで寂しい日を送っていると言う。酔っていてもこうゆう話を聞くと胸が詰まる。生物部で一緒に活動したM君も出席していた。捕虫網で虫採りをした仲だ。秋になると校舎の壁にカメムシが群れをなして集まっていた。それを採った記憶がかすかに残っている。それからでも42年。「あつという間だったな」と思った。

× × × ×

予定の時間が来た。「次は〇〇歳の時に開きます」。幹事のこの言葉でしめとなった。この後も場所をかえて延々と飲んだ。翌日、すごい頭痛。強度の二日酔いだ。昼になってもなおらないので、城山へ散歩に出かけた。よく虫採りに出かけたところだ。所々に当時の面影が残っていて懐かしかった。頂上近くの東屋で休んだ。天井にカメムシが群がっていた。クサギカメムシであった。あの時のカメムシはこれだったのだろうか。体力とともに記憶もうすれていく。これが還暦か。やっぱり同窓会名はずばり「還暦同窓会」の方がよかったのではないかと思った。

山のおじゃまむし(69)

高貴な蛾、イタリアのシャクガ

定年退職の記念に女房とツアーのイタリア旅行にでかけた。いわゆる卒業旅行と言うやつだ。これがよかった。笑い、笑いの連続で、本当に楽しい旅行であった。今回からこのエピソードを数回にわたって話してみよう。まず、旅行に出かける気になったのは、家族と旅行をすれば互助会から8万円が支給されるからだ。つまり8万円をもらうために旅行に出かけたと言うのが本音だ。しかし、女房には「海外旅行に行こうか。お前には苦勞をかけているからな」と言った。「本当。うれしい」と女房は大喜びであった。実は私にはもうひとつの目的があった。このシリーズもネタ不足に陥っているので、外国へ行けばネタが探せるだろうと思ったからである。

× × × ×

数日後、女房は「行き先はイタリア。母も連れて行って」と言った。私は「え!」と思った。というのは、母は81歳の高齢だからである。「大丈夫だろうか」。少々不安ではあったものの、母は前からイタリアへ行きたがっていたので、一緒に行くことにした。「親孝行と女房孝行にネタ探し旅行か。充実した旅行だなー」と思った。ツアー参加者は10組の夫婦と母の21人であった。このうち6組は新婚で4組は老年いや中高年組であった。このメンバーでまずイタリアのミラノへと向かった。ミラノで真っ先に寄ったのが免税店であった。ここで私は驚いた。私の見ている前で、中高年のMさんの奥さんが「これ」と言って、30万円もするカメオのブローチを買われたからである。「高い」。私にはこれ以外の言葉はでてこなかった。これにつられるように新婚組も何万円もするペンダントやブローチを次々と買い出した。この雰囲気飲まれたのか母も高価なブローチを買った。私は「81のお婆が、そんな高いものを」と思った。どうも女性はいくつになってもこうゆうものに愛着があるようだ。さらに母は女房にいった。「子供にも買ってあげたら」。

× × × ×

この言葉が決定打となったのか、女房は子供たちのブローチを買った。私を見るなり女房は「高い買い物をしたので、この旅行ではお父さんのものはなし」と、最初の日に釘を打たれてしまった。海外旅行に免税店めぐりはつきものである。この旅行でもずいぶんまわった。しかし、どの免税店でも必ず何人かが大きな袋を手にしてバスに戻ってくるのである。こうした光景を何回も見ているうちに、「この10組のお土産代はすごい額になるだろうなー」と私の貧乏人根性が出てしまった。

× × × ×

イタリアはブランド品の本場である。特に、ミラノはグッチで有名だ。若いカップルはグッチ商品のならぶ〇〇街へ出かけた。我われ中高年組も後を追った。すごい人であった。どの店にも高級品がならび、別世界へ来たようであった。しかし、店の雰囲気に圧倒されたのか、中へ入っていくものはいなかった。すると中高年組のSさんの奥さんが一人で入っていった。これには皆驚いた。奥さんは「こうゆう時こそ貧乏人は高級品を手にして感触を味わってみるのよ」と、次々と店へ入っていった。すごい度胸であった。しかし、他の者は窓越しに商品を眺めているだけであった。高級感の漂う服を見ていたときである。ショウウィンドウのガラスに止まっているシャクガが目に入った。日本では人気のないこの虫が、ここでは高貴さを漂わせて、光り輝いているように見えた。

山のおじゃま虫（70）

ワイン、イタリアのノミ

イタリアと言えばスパゲティとワイン。この本場の味を満喫するのもイタリア旅行の目的のひとつであった。特にワイン。呑み助の私にはたまらない魅力だった。確かにイタリアはワインの国だ。どの食堂でもワインはジュースとほとんど同じ値段なのである。これも心強かった。値段を気にしなくてワインが飲めたのである。さすがに朝は飲まなかったけど、昼と夜は常に飲んだ。このお陰でメンバーの人たちとも話がはずみ楽しい旅行となった。しかし、ワインもアルコールである。飲めば当然酔う。酔えばどうなるか。イタリアでも日本で焼酎を飲んで失敗した、いや笑い話になるようなエピソードがいくつもあった。

× × × ×

第1日目の夕食の時、私はSさんの隣に座った。Sさんは見るからにお酒が強そうだったので、話がはずむと思ったからである。ボーイが飲み物の注文にきた。するとSさんは「ジュース」。私は「えっ」と思った。Sさんは全くアルコールを受け付けない体質で、においをかいただけで酔ってしまうとのことであった。「こんな人もいるんだ。気の毒に」と思った。このことを女房に話したら、「気の毒はお父さんよ」。そして、皆に「Sさんとうちの人をたして2で割るとちょうどよ」と言ったら大笑いとなった。毎日飲んでいると飲める人と飲めない人がわかってきた。しかし、昼、夜常に飲んでいるのは私だけだ。ある日新婚のMさんが、私の隣に座らせてくださいとやってきた。彼はあまり飲めないのに何故と思った。彼は「どうすればお酒が強くなれるのですか。うらやましいです」と真剣に聞いてきた。「そうか、飲めない人から見れば私は羨望の的か」と優越感をおぼえた。

× × × ×

こちらのスパゲティは量がすごく多い。これに対しワインは小グラスに八分くらいと少ない。もう1杯飲みたいと思うものの、我が家の大蔵大臣の許可が出ない。大盛のスパゲティに小グラスのワイン1杯という食事が続いた。少々物足りなかったけど、体調は最高だ。しかし、いつか大飲みしようとそのチャンスを待っていた。とうとうその日が来た。フレンツェでの夕食はスパゲティにワイン1杯がセットとなっていていたのである。大グラス3杯飲むと酔いがまわり、その勢いでワインを瓶で追加した。いつものパターンだ。さすがにこれだけ飲むと酔う。ホテルではシャワーも浴びずに寝てしまった。ところがこの後に事件？がおきた。トイレのドアが故障して母が出られなくなったのである。女房は私を起こそうと、たたいたりつねったりしたけど全く無反応。泣く泣くフロントへいったけど言葉が通じず大変だったらしい。翌日、女房は私に怒った。しかし、私には全く覚えがないので、無実の罪で怒られているようであった。

× × × ×

イタリアは歴史の国といわれるだけあって各地に古い建物が多い。どの建物にも圧倒された。しかし、心に残ったというか衝撃を受けたのは水の都ベニスで宮殿を見学したときである。陽の全く当たらない牢獄を案内したガイドは「ここにはノミに血を吸われて発狂し、死亡する罪人が後を絶たなかった」と説明した。ノミに血を吸われて発狂する。作り話ではないかと思った。この日の昼食はワインではなくビールを注文した。「今日はワインを飲まないのですか」不思議そうにたずねた。私は「ノミの話を知ったら、ワインが血のように思えるのでやめました」と答えた。これは嘘で本当はこのワインの値段が高く、ビールの3倍もしていたからである。

山のおじゃま虫（71）

日本男子でしょう、イタリアのキチョウ

「旅は道連れ、世は情け」という言葉がある。そのとおりに思う。特に、このイタリア旅行では痛切に感じた。参加者21名は家族のような雰囲気で行動をともにした。まさに道連れであった。しかし、これにはムードメーカーがいたからである。それはSさんの奥様である。奥様のお陰で楽しい旅行となった。例えばローマのホテルでの朝。この日は集合時間が10時と遅かったため朝食は8時からであった。我が家族は7時50分に食堂へいった。すると、3組の夫婦がすでにきて待っていた。いずれも年寄り組である。Sさんは「やっぱり時間前にくるのは年寄りばかりだね」。× × × ×

この旅行で1回だけ楽しくないことがあった。それはイタリアの高速列車でフレンツェからナポリへ移動するときのことである。私の隣はガイドさんなのに大きな黒人が座っていた。彼女は「そこは私の席です」と言った。しかし、黒人は知らん顔。さらに彼女は「切符をみせてください」と迫った。すると黒人は大声で何やらわめいた。それでも彼女はひるむことなくやりあった。その時である。Sさんがかけつけ日本語で「切符を見せろ」と大きな声でいった。そこへ、さらに新婚組のAさんとBさんが助太刀にきて「日本人をなめるな」、「お前、ただ乗りだろう」などと激しくやりあった。この二人はいつも奥さんと手を組んで歩いていたので、なんとなく弱々しい男性に見えた。それが、黒人と激しくやりあっているの、別人のように思えた。それどころか今時には見られない勇敢な若者だと思った。

× × × ×

そのうちに黒人は形相をかえてAさんにつかみかかろうとした。車内は騒然となった。誰かが車掌を呼んできた。今度は車掌と黒人の口論となった。やりあっているうちに黒人はおとなしくなって席を立ち、車掌と別の車両へ出て行った。これで一件落着。車内は静けさを取り戻した。ガイドさんは私の隣に座った。すると彼女はハンカチを取り出し、目頭を拭いた。私は「どうかしたのですか」と声をかけた。すると彼女は「皆さんの思いやり（情）がうれしいのです」と言った。そして、「前にも同じようなことがあり、車掌を呼んだら、当事者同士で話をつけろ」と言ってとりあってくれなかったという。それが今回は「———」と言って、また目頭を押さえた。私はその姿をみて、「世は情けか」と思った。

× × × ×

ナポリでは先ほどの事件が話題となった。私は二人に「あなたたちは勇気があるね」と言った。すると二人は「とんでもない。あれはSさんの奥さんに言われたからです」と首を横に振った。Sさんの奥様は「誰も助けに行かないので腹が立ってきたの。それで主人を行かせたけど負けそうだったので、この二人に何をしているの。あなたたちは日本男子でしょう」と発破をかけたのと言われた。「そうだったのか。やっぱり奥さんはすごい」と思った。二人は「恐ろしくて死ぬ思いでした。その時どんなことをしたよく覚えていません」と話した。すかさずSさんが「でも、そのお陰で二人とも奥さんが惚れなおしたと思うよ」とジョークを言われたら大笑いとなり、この大事件？も終わってみれば楽しい思い出となった。ナポリではポンペイ遺跡を見学した。あの二人はいつものように手をつないで歩いていた。その近くでは日本のキチョウによく似た蝶のオスとメスが戯れていた。この光景があまりにも睦まじそうだったので、手をつないで前を歩いている、夫婦の分身ではないかと思った。